紹　介

●Propyläen-Weltgeschichte.

Hrsg. von Walter Goetz.　10 Bde.

Weltgeschichte なる名稱を以て出されるものには二通りある。一つは、一個人の手に成つたものであり、他は、多くの人々がそれ〴〵その專門に應じて執筆し、これを編纂せるものである。前者の場合には一個人の手に成つてゐるため統一があるのに對し、後者の場合に於ける重なる弱點は、多くの人々に分擔されてゐる結果前後の脈絡、全體的統一の得難き事にあると云はれてゐる。然し、前者の如きものは偉大なる頭腦、豐富なる知識によつてのみ生れるもので、かゝるものゝ出でる事は容易の事ではない。それ故多くの場合後者の方針が取られてゐる。而してかゝるものは各人が自己の專門の範圍を分擔し、その範圍に於けるまとまつた知識を供給し、種々なる斷面を理解せしめる事に於て存在理由を持つてゐるのである。

Propyläen も後者に屬するものである。各卷の標題を示せば次の如くである。

1) Das Erwachsen der Menschheit.
2) Hellas und Rom, Entstehung des Christentums.
3) Das Mittelalter.

4) Das Zeitalter der Gotik und Renaissance
5) Reformation und Gegenreformation.
6) Das Zeitalter des Absolutismus.
7) Revolution und Restauration.
8) Liberalismus und Nationalismus.
9) Die Entstehung des Weltstatensystem.
10) Das Zeitalter des Imperialismus.

Walter Goetz を中心として、G. Steindorff, J. Beloch, K. Hampe, F. Schneider, P. Joachimsen, E. Marcks, W. Platzhoff, A. Stern, E. Brandenburg 等を始め多くの著名の人々が執筆してをり、全體のプランより見れば Ullstein Weltgeschichte に似てをり、それを踏襲してゐる處もある。

Goetz 自身も本世界史を編纂するに際しては、かゝる種類の世界史の持つ弱點をば充分心得てをり、全體の統一に苦心してゐる。而して、かゝる目的を達せんがために彼自身各卷の始めに序論として概觀をしてゐる。それは各々僅々十頁餘づゝのものではあるが全卷を通讀すれば世界史概觀が完成し、Goetz 自身の世界史觀をうかゞひ得るわけである。これは全體の統一のためになしたものであるが吾人には次の事を思ひ一更興味が引かれる。それは彼が未だ組織的に歷史を書かず、自傳の中で歷史を書くに急いではならぬ事を戒め、然しながら一生の中には歷史を書く義務があり、自分は今迄これと云ふ包括的のものを書

かなかつたが、自分は決してこれに滿足してゐるのではなく、他日自分に課せられたる義務を遂行する決意を持つてゐると述べてゐる事である。これを思ひ浮べるとこの序論も彼の世界史への一過程として考へられ一更興味を感じる次第である。

次にこの世界史の據つてゐる立場を考へて見るに、"die Geschichte der Menschheit von ihren dunkeln Anfängen bis zur Gegenwart als eine Einheit zu fassen" (Vorwort) とあり、副題には "Der Werdegang der Menschheit in Gesellschaft und Staat, Wirtschaft und Geistesleben" とある。かくの如き人類の歴史を統一的に把握せんとする事は、ゲッツの主張である Gesamtgeschichte des Menschengeschlecht によつたためと思はれる。それ故内容について見ても地方、國家等を別々に取扱はず、多くは總括的な標題の下に發展の同一性に重きを置いてゐる觀がある。ことに近世以降の取扱ひに於ては從來のものが各國史に分裂してしまひ勝ちなのを改め、總括的な敍述方針を採用してゐる事は注意を引く。又これと共に政治事項より文化事項に力を入れてゐるのも一つの特色であらう。而してかゝる點は十九世紀以降の取扱ひに於て最も顯著である。

體裁を見ると敍述の他に多くの圖版、挿圖、簡單なる史料の複製等を入れてゐる。これ等の中には Ullstein をもととして作られたためか同じものも多いが、新しく加へられたものも相當ある。Ullstein 同様この點で重寶なわけである。なほ各卷の卷末には年表をつけてゐるが、Cambridge History に於ける様なビブリオグラフィーのないのが物足らぬ感じを起させる。

以上は本世界史に關する一般的特色の二三を擧げたのみである。なほ各項目の出來については熟讀翫味の上にゆづらねばならぬ。今はたゞこの新しき世界史の出現を歡び傳へるに止める。(Propyläen Verlag, Berlin, 1929—31)〔廣見〕

● Ernst Kornemann;
Niebuhr und der Aufbau der altrömischen Geschichte.

本論はモムゼン、マイヤー等の歿後、古代ローマ史學界の最高峯に立てるコルネマンが、一九三一年十月六日より十日迄、ボン大學に於て開催さるべかりし第十八回ドイツ歴史學大會—或事情の爲流會となる—に發表せんとせし講演草稿の上梓されしものである。一九三一年そは彼のニーブールの死後滿百年に當る、ボン大學そはニーブールの研究齎圖の最後の場所である、コルネマンに於ては、此年、此所に、歴史に就いて論ぜんとする時、想念自らニーブールに馳り、併せて爾後のローマ史研究の發展を省みる情切なるものがあつたであらう。

本論はもとよりコルネマンの冷靜にして透徹せる理性と、古代ローマ史に對する豐富なる蘊蓄とによる、ニーブール以來百年間の古代ローマ史研究の反省と批判とを主とせるものであ